

## 序に代へて

雑誌名	漢文學會々報
巻	11
ページ	1-5
発行年	1941-02-20
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00147375">http://doi.org/10.15068/00147375</a>

## 序に代へて

昨日と同じく晴れた空には白光の太陽が目映く懸つて居る。久しく雨を知らない舗装道路の上には、白ぼい埃が積つて、自動車の疾駆する度に舞上つては、兩側の屋並をざら／＼に汚して行く。打水をいくら撒いても瞬く程の早さで大空の中に吸ひ取られて仕舞ふ。大帝都を襲つた未曾有の水飢饉の先鞭を爲す、六月も終りの日であつた。都塵を逃れて郊外へ。此處多摩川々畔に一日の散策を楽しむ人々の群々殊に今日は久し振の日曜の爲か、父母に伴はれた子供の聲が、樂しげに川面を渡つて響いて行く。此の中に諸橋先生の温顔を見出した人が若し有つたとしたら恐らく其の人は、

「あゝ先生」

と聲を掛けたであらう。然し夕暮近く先生の御姿を認めた人は、必ずや其の聲を吞んで、凝然と不安氣に見守るより外仕方がなかつたに違ひない、六月三十日。此の夜以來先生は前後四ヶ月に亘る長い病褥に呻吟せられる身と爲られたのである。明くれば七月一日。都下の人々の服装は一齊に夏へと衣更へした。至急來宅して欲しいとの御電話に接して、私は何かの御用事だらうと思ひつゝ參上した。流るゝ汗を拭ひつゝ、硝子戸越しに庭を見遙がす奥の一室に通された時、私は呆然として仕舞つた。餘りに傷々しい先生の御様子に、身體が凝固する如き衝撃に打たれて立竦んだのである。纏て先生は絶間なく襲ひ來る高熱の苦痛を堪へながら、ぼつり／＼、昨日心持よく多摩川へ一家の人々と出掛けた事、夕方急に悪寒を感じたので急遽家に引返した事、昨夜は四十度の高熱で殆んど呻吟し通し、温める、冷すの大騒ぎをして、家族の人々も一睡もしなかつた事等を語つて下さつた。一夜の中に急に落窪んだ様に思はれるあの童眼に、強ひて微笑さへ湛へてゐらつしやつたが、高熱の爲に眞赤に充血して居るのを見て、私は思はず目を反した。先刻出され

た氷の入つたレモンのコップの露繁吹が、滴々と走つて盃の上に流れ下るのを、私は放心した様に見詰めて居たのを記憶して居る。メモを繰つて、日別に學校關係、會議、約束、行事等に出席不可能の旨連絡すべく依頼された私は、暗澹たる心を抱いて門を出た。カッと照り附ける太陽は、草熱れの臭をムウと漂はせて居る。此の暑さの中で四十度の高熱「傍の見る方が堪へられない。」と言葉少なに述懐せられた奥様の御言葉を沁々と繰り返して見る。バスの中に飛び込んで来る風も、容易に滲んだ汗を消し去つては呉れなかつた。

他の先生方や學生諸君を始め、私の病狀報告を聞いた總ての人々は、信じられないと言ふ様に驚愕の色があつた。然し私の見た事實は正に其の通りであつたのである。間もなく先生の御病氣は、風邪らしいと言ふ事が分つた。ほつとした安堵が誰にもあつた。御宅に伺つた折、先生自身も、今度の土曜日(七月六日)の會合には、何とかして出たいと申された事を思ひ浮べて、私は餘り先生の御容態を大袈裟に言つた事を恥ぢる心と、他面、御病氣も二三日にして恢復せられるであらう事を喜ぶ心との入り交じつた妙な二三日を送つた。然し不幸にして私の豫感は適中して仕舞つた。第一學期が殆んど終りに近附いても、先生の快報は聞かれなかつた。否それのみでなく問合せする度毎に、憂愁の眉を顰め行かねばならなかつた。電話に聞く先生の御容態は、恰も其の病勢と苦惱を裏書きする如く、看護の人の焦躁を傳へて來るのみであつた。再度學生の諸君と御見舞に參上した時は、もう面會謝絶で看護の御疲勞が一入目にしみる奥様の口より、御容態を伺つたのみで引退つた。奥様の御言葉を通して、先生の御病體を推察するのが、恐ろしい様な、然し何か言はねばならぬ様な氣持で、ぼつり／＼「絶對安靜」と言ふ言葉の範圍を語らひつゝ、歩道をゆつくり歩いて歸つて來た。

此の頃から先生方を初め他の人々も、病氣御見舞に參宅せられた。然し結果は同一で、誰一人として先生に御目に掛つた者も無く、従つて自らの想像の中に、或は震懼し、或は慰藉して居たのである。こんな状態で第一學期も終を告げて、愈々夏期休暇に入つた。焼け附く烈日の下で勤勞作業が始つた。先生の今にもすり落ちさうな卷脚絆の姿が、今度は見られぬと言つて哄笑した人々の顔も、一樣に爆笑しながらも淋しさうであつた。

御承知の通り、七月中旬より八月にかけて、雨らしいものが殆んどなく、文字通り釜熱の盛夏であつた。木々の梢が、死んだ様にそよもしない。此の酷暑の中で、先生の闘病こそは、全く死物狂ひであつた。或晩の如きは一晚中咳が頻出し、其の度に横隔膜の邊りで、大きな鯉でも暴れ狂ふ如き苦痛が起り、幾度もく息が詰つた由である。身體を苦痛の爲に屈めたら、其を伸す事も出来なかつたとか聞く。風邪から肺炎に、肺炎から肋膜炎にと、病名が幾變遷して、結局肋膜炎と斷定されたのも此の頃である。時恰も帝都は水飢饉の真中で、水道の口からは一滴の雫も出ない幾日かゞ續いた。井戸と言ふ井戸には、幾列も水波みの人々が並んで待つて居る。給水車も出動した。此の時、御家族の方々の御看護の御苦勞は、蓋し想像も及ばざるものであつたと思はれる。御發病になつてからは、其の都度私は學園、學會の様子等を御報告申し上げ、御容態を問ひ合せたりしては、他の人々との連絡に當つた。夏期休暇を利用して上京せられた會員諸兄が、私の報せに驚いて、御見舞に參上せられたのも此の頃である。

かくて八月も終近くなつた時、私は二ヶ月振り度再度御病床で御目に掛る事が出来た。もう危険期は脱して居たので、先生は床の上で伏しながら涼を探つてゐられた。團扇を使はれる手の瘡が痛々しい程細い。

「實際あの時は苦しかつた。こんな大きな鯉がびん／＼はねる様で」と鯉の大きさを示す爲に、兩手を一杯擴げられたけれども、まだ足りない様な御顔色であつた。

「全く生命拾ひした。然し吾輩はまだ死ぬには勿體ないからな。ハ、、、」

先生らしい此の言葉を、久し振に懐しく聞く。此の調子ならもう大丈夫だ。陽光がぐつと南に傾いて、秋の近いのを思はせる。縁側に置かれた、鳥籠の中の小鳥が、天地に潜み宿る秋冷を、呼び出す様に時々囀つて居た。九月の新學期が始まつた。「諸橋先生當分缺講」の掲示を見て、まだ病氣なのかと、餘りの長さに驚く人々もあつた。學生諸君は其の淋しさを紛らす爲に、白球を追つて毎日駆け廻つた。然しそれも數日、疲勞にへと／＼に爲つた人々は、より以上疲勞に憔悴せられた内野先生の御姿に氣附いたのである。再び我々は深い深い憂愁のどん底に、たゞき込まれて仕舞つた。

「子供が病氣でね。もう五月になりますよ。昨夜も一睡もしなかつたのでね。どうも疲れて仕舞つた。」  
めつきりと白髪を増した御髭の邊りを、慥げながらの御言葉。

「御様子は如何ですか。」

「もう駄目ですよ。大腸加答兒の様なものですかね。どうしても下痢が止らないので衰弱して仕舞ひましてね。まあ時日の問題ですよ。」

すつかり諦観された御言葉は、それ丈鋭く我々の胸を貫いた。始めて聞く御令嬢(三女義子殿御茶水研究科在學)が、再起不可能との事に、我々は顔を見合せて仕舞つた。全くお慰めする言葉もなかつた。

爾後、命を削る御心痛を押して、登校せられる先生の、石段を昇り降りせられる足取は、日増しに力なくなつて來た。そして其の結果は、きまつて悪かつた。諸橋先生の時と違つて、内野先生の御令嬢の御容態は、命の危険を一秒二秒と數へて居る様な切迫があつた。

「御容態は如何ですか？」

「はあ有難う。もう駄目です。まあ今日明日でせうかね。」

冷水を浴びた様な惡寒がサツと背筋を走り去る。眞晝の日影の下に見た如き惡夢。そして私は其の翌々日遂に御逝去の報を受つたのである。忘れもしない九月二十九日である。駆けつけた私は、先生と種々の手筈をして夜遅く歸つて來た。葬儀は翌々日執行せられた。御手傳に行つた學生諸君へ、

「やあ、御苦勞ですが御願します。」と強ひて元氣に申された、和服姿の先生の御體からは、今こそ子に先立たれた親の悲哀が、果てしも無く立ち昇つて居る様に感ぜられた。本當に盛大な御葬儀であつた。棺の上に飾られた、黒柩の端麗な遺影が、其の薄幸を物語る如く、人々の胸を打つてやまない。供へられた生花の、一輪、二輪が元の枝に歸る事も出來ず疊の上を彩つて居る。讀經。燒香。出棺。家の内外から、道路を溢れた人々の目には、等しく涙が光つて居た。

私達は一先づ別室に退いて、挨拶状の整理發送に忙しく幾時間かを過した。突然自動車の音が聞えて來たので、玄關に御出迎へした。遺骨を納めた箱を抱いて立たれた先生の姿、それは悲哀も、諦觀も、否凡ゆる總てのものを脱却して、淨化された、崇嚴な御姿であつた。又苦惱を越えて、明日への力強い發足を約束する姿でもあつた。運命の神に幾度毆かれても百千の管でさいなまれても、力強く立上る姿、それを私は内野先生に認められる様な気がする。間もなく先生は、元氣に學校へ登校せられる様になつた。悲しみと落膽の爲に、床に就かれた奥様を看護されつゝも、先生の御姿を學校で拜見する時は、幾苦難を通り越えた、忍従よりも、もつと深い悟道の奥から、滲み出る様な輝があつた。創痕未だ癒え去らぬ先生を圍んで、御慰問のテニス大會も時々催した。ラケットに響く球の音が、高ければ高い程、先生を喝采したものだ。又此の頃私は「翠替とけて……」と言ふ一葉の繪葉書を、伊東の諸橋先生から戴いた。御病後の御靜養を只管祈つた次第である。

運動會其他の行事に取り紛れて、暫く忘れるともなく忘れて居た十月末の一日、四ヶ月振りで諸橋先生を研究室に迎へた。苦難を乗り越え、試練を克服して、以前に勝る御元氣な兩先生を圍んで、我々は無精にはしやいだ。自他の別こそあれ、我々も苦難や試練を通り過ぎて、今日の日にめぐり合つたのである。

十一月廿一日茗溪會館で、諸橋先生御全快の御祝に招待された。用意の出來上る迄、會館側の芝生に腰を下ろしてクローバの葉を數へつゝ、燦々たる日光に浴しながら、先生の御話を聞き入つた。

「病氣になつて、本當に健康の有難さを思ふ。諸君も極力健康だけには留意して欲しい。病後自分は大事を取つて、極力健康に注意して居るから、お蔭で體重も以前より増し、身體も少し太つたよ。」

御言葉に誘はれて、先生の御顔を振り仰ぐと、紅潮した御顔の奥には、常に變らぬあの微笑が溢れて居た。向うでは内野先生の朗な笑顔も見えて居る。用意が出來たのか委員の諸君の急ぎ足も響いて來た。では私も此處邊りでやめて食堂に行く事にしよう。

(尾關記)